

2023年10月6日(金)

老球の細道754号

### 実録「仁義なき腰痛との戦い」PART 3

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

俳人正岡子規の病床日記に『仰臥漫録』『病床六尺』(岩波文庫)というのがある。子規が脊椎カリエスで病に伏していた時に書いた本である。病気の症状に苦しみながら、病気の進行状態、食事の内容、花や食べ物のスケッチなどが書かれてある。

高校時代からバスケットボール日誌を書き続けた習慣で、何か大きな目標に立ち向かう時は、必ず日誌を書いて記録に残すことにしている。今回の腰痛との戦いも、4月に病名がはっきりと診断された日から克服するための記録を書き続けて来た。日常生活の状況、運動した時の傷み具合、痛みやしびれを失くすためのトレーニングメニュー、薬の副作用状況などを思うがままに書き連ねた。症状が良くなってきた時は赤のマーカーをつけてモチベーションアップを図った。病院に入院した時も有り余る時間を使って書き続けた。

今回の話は手術当日から始まる。前日夜から2時間ごとにトイレに起きた。なぜかその都度見ていた夢がディナイディフェンスだった。夢にはその人にとって意味のあることを見られると言われるが、ここに来てディナイは意味不明であった。手術後の尿管による小便が「ディナイ」に関連していたのだろうか。

朝6時に看護師が来て点滴をつけた。検診で体温、酸素飽和度、血圧、異状なし。9時に病室を出て手術室に入り、意識が戻るまで午後1時頃になることを看護師から伝えられた。いよいよ腹をくくらなければならない。私の場合は腰をくぐるのか。朝、家族から励ましの電話が来た。コロナ注意のために手術には家族が付き添うことはできない。私はもしもの場合を考えて辞世の句とも思ったが、また皆から大げさだと笑われるので我慢した。

9時に看護師が迎えに来た。歩いて手術室に行こうとしたら、ストレッチャーに乗ってくださいと注意をされて、改めて緊張感が高まって来た。バスケットの試合の緊張感とは別次元であったが、頭の中では「人は試練に耐えた強さだけ成長できる」(新井春生)を思い出して手術室に向かった。ウクライナの戦場で戦っている人たちに比べればなんのその。

手術室に医師と看護師たちが待っていて、まずは挨拶。「よろしくお願いします」と気合を入れて覚悟を決めた。手術台に身体をセットアップされ、色々な器具が体中につけられた。その後、麻酔の先生から「点滴を入れるとすぐに眠りますよ」。その後意識なし。

時間経過の感覚がなく、いつのまにか寝ている私の周りで騒がしい声が聞こえて来た。飲み会の会場で周囲が騒がしいおしゃべりしている状況のようだった。その時医師から「室井さん！終わりましたよ」と告げられた。手術が終了。「生きていた」、少し涙が出た。

午後2時に病室に戻る。麻酔から覚めたばかりなので意識はまだ朦朧が続く。ここから翌日まで飲まず、食わず、ベッドの上で寝返りだけの地獄の時間が続く。手術後の痛みはなかったが、何よりも辛かったのは尿管につながれた状態でおしっこが出そうでディナイ感覚だった。「辛」いことを「一」がんばりすれば「幸」せになれるはずだったが。(続く)